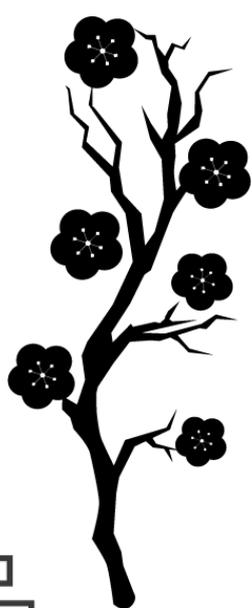


湯島聖堂漢文檢定

寺子屋編 漢詩

中級





48 鹿柴

王維

鹿柴

王維

空山 人を見ず

空山不見人

但だ 人語の響きを聞くのみ

但聞人語響

返景 深林に入り

返景入深林

復た照らす 青苔の上

復照青苔上

詩の意味

鹿の柵

ひっそりした山には、人のすがたは見えない。  
どこからか人の話し声らしきものが聞こえてくるだけだ。  
夕日の光が深い林の中にさし込み、  
そして青い苔を照らしている。

語句の解説

- 鹿柴…野生の鹿を防ぐ柵。
- 空山…ひっそりした山。
- 返景…夕日の光。
- 復た…「そして」という意味。
- 青苔の上…木の根元の青い苔が生えているあたり。「上」はあたり。

作者の紹介(杜牧)

中国、唐の時代の詩人(六九九?~七六一?)。字は摩詰。若くして役人になり、後に高い地位に就きましたが、静かな自然の中で暮らすことを好み、都の郊外に別荘を構え、多くの詩を作りました。

49 鶴鶴楼に登る

王之渙

登鶴鶴楼

王之渙

白日 山に依りて尽き

白日依山尽

黄河 海に入りて流る

黄河入海流

千里の目を窮めんと欲して

欲窮千里目

更に上る 一層の楼

更上一层楼

詩の意味

鶴鶴楼に登って

輝く太陽が山なみによりそうように沈み、  
黄河は海に向かって勢いよく流れていく。  
はるか千里も遠くのかなたまで眺めたいと思つて、  
さらにもう一階上に登った。

語句の解説

- 鶴鶴楼…山西省の黄河の川岸にあつた建物の名。昔、こうのと(鶴鶴)が巢を作つたことから名付けられた。
- 白日…輝く太陽。
- 黄河…中国北部を流れる大河。
- 千里の目…千里のかなたまでの眺め。
- 一層の楼…もう一つ上の階。

作者の紹介(王之渙)

中国、唐の時代の詩人(六八八~七四二)。字は季陵。若い頃は、勝手気ままな生活をしていましたが、後に、行いを改め、詩文を作ることに励んで、名声をあげました。

50 磧中の作

岑参

磧中作

岑参

馬を走らせて西来 天に到らんと欲す

走馬西来欲到天

家を辞してより 月の両回円なるを見る

辞家見月兩回円

今夜は知らず 何れの処にか宿するを

今夜不知何処宿

平沙万里 人煙絶ゆ

平沙万里絶人煙

詩の意味

砂漠での作

馬を走らせて西へ西へと行くと、今にも天に届きそうだが、わが家を出発してから、月が二回満月になったのを見た。今夜はいつたどこに泊まるのかわからない。見渡すかぎり平らな砂漠がどこまでも続き、人家の煙などどこにも見えない。

語句の解説

磧…小石まじりの砂漠。

西来…西の方に向かつていく。

天に到らんと欲す…今にも天に届きそうである。

家を辞してより…わが家を出発してから。

月の両回円なるを見る…月が二

回満月になったのを見る。二か月経ったことをいう。

平沙万里…平らな砂漠がどこまでも広々と続く。「沙」は「砂」と同じ。

人煙…人の住む家から立ちのぼる食事を作る煙。

作者の紹介 (岑参)

中国、唐の時代の詩人(七一五〜七七〇)。役人となり、二度ほど西の砂漠地方に行った経験を持ち、戦場を詠んだ優れた作品を残しています。杜甫と親しく交わりました。

51 胡隠君を尋ぬ

高啓

尋胡隠君

高啓

水を渡り 復た水を渡り

渡水復渡水

花を看 還た花を看る

看花還看花

春風 江上の路

春風江上路

覚えず 君が家に到る

不覚到君家

詩の意味

胡隠君を訪ねる

川を渡り、また川を渡り、花を見、また花を見ながら、春風の吹く川沿いの道を行くと、いつのまにやら君の家に着いた。

語句の解説

胡隠君…胡は姓、隠君は世間から隠れ住んでいる人。

水…川。中国では「水」という言葉で、川、湖などを表す。

覚えず…いつの間にか。知らず知らずのうちに。

江上…川のほとり。

作者の紹介 (高啓)

中国、明の時代の詩人(一三三六〜一三七四)。字は季迪。史書を好んで読み、歴史を編纂する役人となりましたが、職を辞して故郷へ帰りました。

52 早に白帝城を發す 李白

早發白帝城

李白

朝に辞す 白帝彩雲の間

朝辞白帝彩雲間

千里の江陵 一日にして還る

千里江陵一日還

兩岸の猿声 啼いて住まざるに

兩岸猿声啼不住

輕舟已に過ぐ 万重の山

輕舟已過万重山

詩の意味

朝早く白帝城を出発して

朝早く、朝焼け雲のたなびく白帝城に別れを告げて、峡谷を下ると、千里も離れた江陵まで、たった一日で着いてしまふ。

長江の兩岸に、群れをなす猿の鳴き声が続いてるうちに、私(作者)の乗った軽い舟は、幾重にも重なった山の間を通り抜けて行く。

語句の解説

早に：朝早く。

までの千里の船旅。

白帝城：現在の重慶市奉節県の東にあつた砦。

猿声：猿の鳴き声。

彩雲：朝焼け雲。

啼いて住まざるに：鳴き終わらないうちに。絶え間なく鳴く。

千里の江陵：千里も遠く離れた江陵(現在の湖北省荊州市)

万重の山：幾重にも重なる山々。

作者の紹介(李白)

中国、唐の時代の詩人(七〇一〜七六二)。字は太白。宮廷詩人として活躍したこともありましたが、放浪の旅の中で、多くの詩を作り、「詩仙(詩の仙人)」と呼ばれました。唐代の代表的な詩人で、杜甫と並んで「李杜」と呼ばれました。

53 山行 杜牧

山行

杜牧

遠く寒山に上れば 石径斜めなり

遠上寒山石径斜

白雲生ずる処 人家あり

白雲生処有人家

車を停めて坐に愛す 楓林の晩

停車坐愛楓林晩

霜葉は二月の花よりも紅なり

霜葉紅於二月花

詩の意味

山行

遠く木の葉が落ち寒々とした山に登っていくと、石畳の道が斜めに続いている。はるか山の頂上に近い白雲が生じるあたりに、人家が見える。

車を止めて、気の向くままに夕暮れの楓の林を眺めると、霜のために赤く色づいた楓の葉は、二月に咲く花よりも赤々としている。

語句の解説

寒山：木の葉が枯れ落ち、寒々とした山。

霜葉：霜によつて赤く色づいた楓の葉。

石径：石を敷きつめた道。

二月の花：現在の三月から四月にかけて咲く花。梅、桃など春の花の咲く時期であり、特定の花を指したのではないだろう。

斜めなり：山の頂上に向かって道が斜めに続いているようす。

坐に：何をするといいこともなく。

作者の紹介(杜牧)

中国、唐の時代の詩人(八〇三〜八五三)。字は牧之。若くして進士(役人を選ぶ試験)に合格して役人となりました。七言絶句に優れていました。

54 友人を送る 李白

送友人

李白

青山 北郭に横たわり

青山横北郭

白水 東城を遶る

白水遶東城

此地 一たび別れを為し

此地一為別

孤蓬 万里に征く

孤蓬万里征

浮雲 遊子の意

浮雲遊子意

落日 故人の情

落日故人情

手を揮つて 茲より去れば

揮手自茲去

蕭蕭として 班馬鳴く

蕭蕭班馬鳴

詩の意味

友人が旅立つのを見送る

青山やまが町の北側に連なり、  
白く輝く川が町の東側を取り巻くように流れている。  
今この場所で別れを告げ、  
君は風に吹かれてさすらい蓬のように万里のあなたへと旅立つのだ。  
空に浮かぶ雲は旅人である君の心であり、  
沈みゆく夕陽は君を見送る私（作者）の心だ。  
手を振りながらここから旅だつて行こうとすると、  
ものさびしげな声で別れ行く馬さえもいらないだ。

語句の解説

- 送る…「送別の歌」、旅立つ人
- 逆に對して見送る人が送る歌。
- に見送る人に対して旅立つ人が贈る歌を「留別の歌」という。
- 青山…青々と木々の茂った山。
- 北郭…町の北側。郭は町のこと。
- 白水…白く輝く川。
- 東城を遶る…町の東側を取り巻くように流れている。
- 此地…今滞在するこの場所。
- 別れの宴をしている場所。
- 孤蓬…転蓬。根がなく風に吹き飛ぶ。
- 遊子…旅人。ここでは、旅立つ友人。
- 故人…古くからの友人。ここでは、見送る作者を指す。
- 手を揮つて…大きく手を振つて動作としての別れのあいさつ。
- 蕭蕭として…ものさびしい音。ここでは、ものさびしい馬の鳴き声。
- 班馬…別れゆく馬。「班」は別れる。

作者の紹介(李白)

中国、唐の時代の詩人(七〇一〜七六二)。字は太白。宮廷詩人として活躍したこともありましたが、放浪の旅の中で、多くの詩を作り、「詩仙(詩の仙人)」と呼ばれました。唐代の代表的な詩人で、杜甫と並んで「李杜」と呼ばれました。

55 岳陽楼に登る

杜甫

登岳陽楼

杜甫

昔聞く 洞庭の水

昔聞洞庭水

今上る 岳陽楼

今上岳陽楼

呉楚 東南に坼け

呉楚東南坼

乾坤 日夜浮かぶ

乾坤日夜浮

親朋 一字無く

親朋無一字

老病 孤舟有り

老病有孤舟

戎馬 関山の北

戎馬関山北

軒に憑れば 涕泗流る

憑軒涕泗流

詩の意味

岳陽楼に登って

昔から洞庭湖の雄大さは聞いていたが、

今、岳陽楼に登って自分の目でその湖水を眺めている。

呉と楚の国はこの湖によって東と南に引き裂かれており、

天地すべてのものが昼も夜も水に影を落としている。

今の私（作者）には親せきや友人からの一字の便りもなく、

年老いて病気がちの身にはだだ一そこの小舟があるだけだ。

今なお戦争は関所や山をへだてた北の都の地で続いている。

岳陽楼の手すりに寄りかかって都を思うと、涙が流れ落ちるばかりだ。

語句の解説

○ 岳陽楼：洞庭湖の東北の岸に建

つ楼。ここからの雄大な眺めを

多くの文人が愛した。

○ 洞庭の水：洞庭湖。湖南省北

部にある中国第二の湖。

○ 呉楚：中国古代の大国の名。江

蘇省と浙江省を領有した呉、湖

北省と湖南省を領有した楚の国

をいう。

○ 乾坤：天と地。

○ 日夜浮かぶ：昼夜の区別なく、

湖面に映し出されている。

○ 親朋：親せきや友人。

○ 一字無く：一字の便りもない。

○ 少しも手紙が来ない。

○ 老病：年老いて病気がち。

○ 戎馬：軍馬・戦馬

○ 関山の北：関所や山をへだてた

北の都の地。

○ 軒に憑れば：岳陽楼の手すりに

寄りかかると。

作者の紹介（杜甫）

中国、唐の時代の詩人（七一二～七七〇）。字は子美。役人として

活躍しようとしたが、思うようにならず、家族を連れて都を離れ、

放浪の旅のうちに亡くなりました。優れた詩を数多く残したところか

ら「詩聖（詩の聖人）」と呼ばれています。唐を代表する詩人で、李白

と並んで「李杜」と呼ばれます。

56 桂林莊雜詠 諸生に示す 広瀬淡窓

桂林莊雜詠示諸生 広瀬淡窓

道<sup>い</sup>を休<sup>やす</sup>めよ 他<sup>た</sup>郷<sup>きょう</sup> 苦<sup>く</sup>辛<sup>しん</sup>多<sup>おほ</sup>しと

休道他郷多苦辛

同<sup>どう</sup>袍<sup>ぼう</sup>友<sup>とも</sup>有<sup>あ</sup>り 自<sup>おの</sup>ら相<sup>あ</sup>親<sup>い</sup>しむ

同袍有友自相親

柴<sup>さい</sup>扉<sup>ひ</sup>曉<sup>あかつき</sup>に出<sup>い</sup>ずれば 霜<sup>しも</sup> 雪<sup>ゆき</sup>のごとし

柴扉曉出霜如雪

君<sup>きみ</sup>は川<sup>せんに</sup>流<sup>ゆう</sup>を汲<sup>く</sup>め 我<sup>われ</sup>は薪<sup>たきぎ</sup>を拾<sup>ひろ</sup>わん

君汲川流我拾薪

詩の意味

桂林莊で門人に示す

愚痴<sup>ぐち</sup>をこぼすのはよそう、他<sup>た</sup>国<sup>こく</sup>で<sup>の</sup>苦<sup>く</sup>勞<sup>ろう</sup>が<sup>多</sup>い<sup>な</sup>どと。

一枚<sup>いちまい</sup>の綿<sup>わた</sup>入<sup>い</sup>れを貸<sup>か</sup>し合<sup>あ</sup>つて着<sup>き</sup>る<sup>よ</sup>うな親<sup>した</sup>しい友<sup>とも</sup>も、やがて<sup>で</sup>き<sup>る</sup>だ<sup>ら</sup>う。  
枝<sup>えだ</sup>折<sup>お</sup>り戸<sup>ど</sup>を開<sup>あ</sup>けて、朝<sup>あさ</sup>早<sup>はや</sup>く外<sup>そと</sup>に出<sup>で</sup>てみ<sup>る</sup>と、一<sup>いち</sup>面<sup>めん</sup>に霜<sup>しも</sup>が降<sup>お</sup>り、ま<sup>る</sup>で雪<sup>ゆき</sup>が降<sup>ふ</sup>つた<sup>よ</sup>うだ。

君<sup>きみ</sup>は川<sup>かわ</sup>の水<sup>みづ</sup>を汲<sup>く</sup>みた<sup>ま</sup>え、私<sup>わたし</sup>は薪<sup>たきぎ</sup>を拾<sup>ひろ</sup>つて<sup>こ</sup>よ<sup>う</sup>。

語句の解説

○ 桂林莊<sup>けいりんそう</sup>：広瀬淡窓<sup>ひろせたんそう</sup>が開<sup>ひら</sup>いた塾<sup>じゆく</sup>の名<sup>な</sup>前<sup>まえ</sup>。

めて作<sup>つく</sup>った、簡<sup>かん</sup>単<sup>たん</sup>な開<sup>ひら</sup>き戸<sup>ど</sup>。こ

名<sup>な</sup>前<sup>まえ</sup>。

○ 同<sup>どう</sup>袍<sup>ぼう</sup>：一枚<sup>いちまい</sup>の綿<sup>わた</sup>入<sup>い</sup>れ(どてら)

○ 霜<sup>しも</sup> 雪<sup>ゆき</sup>のごとし：霜<sup>しも</sup>が雪<sup>ゆき</sup>のよう

を貸<sup>か</sup>し合<sup>あ</sup>つて着<sup>き</sup>る<sup>こ</sup>と。

に白<sup>しろ</sup>く降<sup>お</sup>りて<sup>い</sup>る。

○ 柴<sup>さい</sup>扉<sup>ひ</sup>：枝<sup>えだ</sup>折<sup>お</sup>り戸<sup>ど</sup>。小<sup>こ</sup>枝<sup>えだ</sup>など<sup>を</sup>集<sup>あつ</sup>

○ 薪<sup>たきぎ</sup>：ま<sup>き</sup>。炊<sup>すい</sup>事<sup>じ</sup>の燃<sup>ねん</sup>料<sup>りょう</sup>に<sup>す</sup>る小<sup>こ</sup>枝<sup>えだ</sup>。

作者の紹介(広瀬淡窓)

江戸<sup>えど</sup>時<sup>じ</sup>代<sup>だい</sup>の詩<sup>し</sup>人<sup>じん</sup>、教<sup>きやう</sup>育<sup>いく</sup>者<sup>しゃ</sup>(一七八二〜一八五六)。豊<sup>ぶん</sup>後<sup>ご</sup>(現<sup>げん</sup>在<sup>ざい</sup>の<sup>お</sup>大<sup>お</sup>分<sup>ぶん</sup>

県<sup>けん</sup>)の<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>。名<sup>な</sup>は健<sup>けん</sup>。号<sup>ごう</sup>は淡<sup>たん</sup>窓<sup>そう</sup>。故<sup>こ</sup>郷<sup>きやう</sup>の<sup>ひた</sup>日<sup>ひ</sup>田<sup>た</sup>に桂<sup>けい</sup>林<sup>りん</sup>莊<sup>そう</sup>と<sup>い</sup>う塾<sup>じゆく</sup>を<sup>ひら</sup>開<sup>ひら</sup>き

した。後<sup>のち</sup>に<sup>い</sup>て<sup>ん</sup>移<sup>い</sup>転<sup>てん</sup>して<sup>な</sup>名<sup>な</sup>を<sup>かん</sup>咸<sup>かん</sup>宜<sup>ぎ</sup>園<sup>えん</sup>と<sup>あらた</sup>改<sup>あらた</sup>め<sup>ま</sup>した<sup>が</sup>、全<sup>ぜん</sup>国<sup>こく</sup>から塾<sup>じゆく</sup>生<sup>せい</sup>が<sup>あつ</sup>集<sup>あつ</sup>まり、

その数<sup>かず</sup>は<sup>よん</sup>千<sup>せん</sup>人<sup>にん</sup>を<sup>こ</sup>越<sup>こ</sup>え<sup>た</sup>とも<sup>い</sup>言<sup>い</sup>わ<sup>れ</sup>ま<sup>す</sup>。

湯島聖堂漢文検定 テキスト

寺子屋編 漢詩 中級

編集 湯島聖堂漢文検定編集委員会

発行日 令和六年六月一日 初版発行

刊行 湯島聖堂漢文検定編集委員会

東京都文京区湯島一の四の二五 湯島聖堂構内

制作 朔工房

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は禁じます